

名大第2外科 国島和夫
今泉宗久, 安江万二, 陶山元一
昭和38年1月より昭和40年4月までに当科で切除された肺癌24例を対象として, 切除後3年以上生存した症例を検討した. 入院死2例をのぞいた葉切12例と全剝10例の計22例の術後経過を調査した. 3年以内に16例死亡した. 6例(36.7%)が3年以上生存したが, 2例はその後死亡. 1例は現在再発加療中である. 切除後3年経過しても転移再発するものがあり, 長期生存は5年以上経過をみる必要がある. 10年以上生存した2例を供覧した.

39. 原発性肺癌切除後3年以上生存した50例の検討

愛知県がんセンター

外科第2部

唐沢和夫, 岡田慶夫, 赤嶺安貞
三浦重人, 高木 巖
昭和47年4月までの原発性肺癌切除例135例のうち, 3年以上生存したものは50例であった. 治ゆ, 準治ゆ手術群の3年生存率は扁平上皮癌が60.9%, 腺癌55.6%, 未分化癌58.8%で, 治ゆ手術が行い得れば, 3年生存率では各組織型の間には有意の差はない. 腺癌の中には再発後長期間生存するものがあり, 扁平上皮癌では, 術後比較的早期に血行転移を起すものは低分化型であるが, 腺癌未分化癌に較べ局所再発が多い.

九州支部

□第13回

日本肺癌学会九州支部

昭和50年7月6日(日)

長崎市カトリックセンター

当番幹事 辻 泰邦

(長崎大学第1外科)

1. 転移性肺腫瘍に対する手術適応の検討

久留米大学医学部

第1外科教室

衛藤道生, 桑野建治, 武田仁良

猪口嘉三, 脇坂順一

最近5年間に32例の転移性肺腫瘍を経験し, その中9例につき10回の手術を行った. この切除肺から, 健常肺と思われる肺域の微小転移巣の有無, 原発巣別, 肺転移までの期間, X線像, 肺転移巣の処置, T.D.T, 転帰について検討した.

絨毛上皮腫, 肉腫などでは微小転移巣が少なく, T.D.Tの長いものが比較的予後がよかった.

2. 切除例におけるリンパ節転移よりみた肺癌の予後について

長崎大学第一外科 大曲武征

一万田充俊, 田淵純宏

永野信吉, 内山貴堯, 武富勝郎

綾部公恣, 柴田紘一郎

富田正雄, 辻 泰郎

昭和30年5月より昭和45年6月までに長崎大学第一外科にて診療した原発性肺癌は134例あり, 切除例96例(71.6%)であった. 切除例96例中予後が判明した88例について, 検討した. 5年生存率は葉切で21.0%, 肺剝で3.8%であり明らかに葉切が良く, 葉切が最優先されるべきことを強調した. リンパ節転移については, リンパ節転移陰性

群の5年生存率は30.8%, 肺門リンパ節転移群23.1%, 縦隔リンパ節転移群7.1%とリンパ節転移がすすむにつれて生存率は低下した. しかし縦隔リンパ節転移診断の困難性と縦隔リンパ節転移群で郭清されたものに5年生存例がみられたことから, 出来るだけ縦隔郭清を行うべきである.

3. 沖縄県における肺癌診療の実態

琉球大学保健学部外科

源河圭一郎, 宮城靖, 当山真人

金城清光, 外間 章, 正義之

沖縄県内において昭和42年1月から昭和50年4月までに326例の原発性肺癌を経験した. 性比は男3:女1. 本土復帰前の症例が全体の3分の2を占めている. 臨床病期分類IおよびIIは22%で, IIIおよびIVが76%である. 全症例の3分の1は集検で発見されている.

病理組織像は復期前では扁平上皮癌と腺癌が, ほゞ同数であったのに対して, 復帰後では扁平上皮癌が圧倒的に増加し, 腺癌は減少傾向にある. 復帰前では肺野型肺癌が多かったが復帰後では肺門型が増加した.

手術が行なわれた症例は試験開胸を含めて全体の33.2%で, そのうち肺切除が行なわれたのは全体の25.2%にすぎない. 進行肺癌の多い現在, 放射線治療や化学療法に大きく依存せざるを得ないのが実情である.

4. 喫煙歴と肺癌の組織型とに関する研究

—喫煙人口の男女別比率との関連において—

門司鉄道病院呼吸器内科

松葉健一

九大胸部疾患研究施設

重松信昭, 杉山浩太郎